

## モンゴルにおける ウマの見分けかたに関する一資料

烏 仁 其 其 格

モンゴル遊牧生活においてはウマの乗り物としての役割が格別に大きい。ウマは家畜放牧をはじめとして旅、狩猟、情報伝達などの用途に広く利用されるとともに、戦闘の具としても用いられ、13世紀における強大なモンゴル帝国成立に重要な役割を演じた。モンゴル遊牧民はウマの性質、習性を知悉し、生活生産、社会活動に応じてウマの選定を行ってきた。つまりどんなウマが季節別に利用されるか、どんなウマは険しい地形に適しているか、どんなウマはいくつかの黒白の道のり（家畜の毛色が目で判断できる距離を指す）を速く走れるかなどの経験、さらに対外戦争など特定の機会において何十万頭という多数のウマを揃えて戦闘に出かけるなど、ウマの活躍のさまざまな場面を通じてウマに関するモンゴル独特の壮大な知識を蓄積してきた。それが今日まで伝承され、実際に維持・活用されている。その一部は書きとどめられ、一般に「*sudur bičig*」（経書）などと称され、写本の形を取った文献が現在多く発見されている。たとえば、中国各地の図書館には『十二種の能力の具わった三種の駿馬の特徴』（*arban goyar ayımay erdem tegüsüsen yurban jüil külüg-ün singji orusiba*）、『相馬三

---

キーワード：モンゴル, *morin-u simji*, 駿馬, 遊牧民, 家畜観

十六鑑』 (*mori mal-i üjekü yučin jiryuyan jüil-ün toli bičig*), 『馬王書』 (*morin-u qayan-i ündüsün*) という資料の存在が知られている<sup>1)</sup>。またデンマークのコペンハーゲンの王立図書館にも『馬王明王相馬経』 (*erten-ü damda-yin qayanggiru-a morin-u singji nomlaju jokiyaysan debter*) という写本が保存され、モンゴル国にも『ウマの特徴』 (*morin-u sinji*) と総称される文献がある。それは伝承されてきた写本の中から11を選んでまとめたものである。1989年には上記の『ウマの特徴』に収められた11の写本が再び整理され<sup>2)</sup>、新たにいくつかの写本を加えた『駿馬の特徴』 (*külig-ün sinji*) という題目で出版されている<sup>3)</sup>。これらの「*sudur bičig*」にはモンゴル遊牧生活に活用されるウマを選ぶ基準がさまざまな形で示されているのである。

本稿は『ウマの特徴』のうち、より内容の詳細なものを訳注し、「*sudur bičig*」の全容を示し、モンゴル遊牧民がどのような基準でウマを選んでいたのかを検討する。『ウマの特徴』に関する研究も進められ、その成果が発表されている<sup>4)</sup>。これらの先行研究は『ウマの特徴』の部分的な内容を示したり、写本の内容上の特徴を言及したりしているが、写本原典そのものはいまだ日本語に訳されておらず、その重要性のわりに全容はあまり知られていない。

なお本稿は1978年版『ウマの特徴』を基本として扱っているが、補充できるような部分を『駿馬の特徴』より適恰的に引用するだろう。

## 一 『ウマの特徴』の紹介

『ウマの特徴』には11の写本が収められており（以下、写本1、写本2、……写本11というようにそれぞれ示す）、そのうち写本6、7、10のタイトルが不明であるが、他の写本のタイトルは次のように示されている。

erdenitü qurdun ridi külüg-ün erdem-tü kelberi-yin singji-yi ilyaburilan tus tus-un jokildaqu jasaly-a-yi todurqayilaysan mergen toli neretü bülüg orusiba (宝となる駿馬の貴重な形の特徴を見分け、それぞれに合う調教を説明する賢い鏡という章が存する)

erdeni-tü külüg-i sinjileküi ba uyaqu jasaqu sudur orusibai (宝となる駿馬を見分けると調教するとの経書が存する)

morin-u erdeni-yi uqayaraqu siker amta neretü bülüg (ウマの宝が分かる飴の味という章)

amitan-u jayay-a-bar boluysan erdeni asuru sayin kiged mayui qoyar бүкүй-yin tula ariyun-a ilyaqu tobči šastir (動物の生まれつきの宝に良し悪しの2つあるのを鮮明に区別する略経)

morin-u sayin-i uqayulayči mergen tobči neretü bülüg (ウマの良さが分かる賢い概要という章)

morin-u sinji-yin jiryuyan jüil-ün eke bičig ene bui (ウマの特徴の六種の基となる書がこれである)

enedkeg-ün yosun-a jokildun ayuluysan morin-u singji čoytu kesig kemegdekü orusibai (インドの方法に基づいたウマの特徴を見分ける輝しい恩恵というのが存する)

sayin morin-i sinjiku sudur orusibai (良いウマを見分ける経書が存する)

上記のタイトルからも分かるように、『ウマの特徴』の各写本においては、良いウマまたはその宝となる特徴を見分けるとともに、それに合わせて調教するという2つのポイントが主な内容をなしている。まず良いウマを発見し、そのウマの特徴に合わせた調教を施すことによって、ウマの能力を真に発揮させることが目的とされている。

各写本の長短は実にさまざまであり、短いものは僅か3頁で、長いのは

30頁に及ぶものもある。したがって内容の豊かさも異なる。ウマの外観の特徴について簡略に見分けた項目があれば、さらに何頁にも及ぶ詳しく説明した項目も見られる。同じ項目がいくつかの写本において言及されるが、その説明の分量、詳しさなどはさまざまである。

写本においては仏教用語やウマに関する詩、讃歌、祝い言葉などが所々嵌められている。写本1の冒頭では *om sayin amuyulang boltuyai* (平和でありますように) (Lubsangbaldan 1978: 16), 写本5では *manjusiri burqandur mörgümüi* (文殊菩薩に跪拝しよう) というような仏教に関わる用語が見受けられる (同前 139)。写本4においても仏教に関わる言葉が見られる。これらの写本は仏教の影響をある程度受けたことが示されている。またウマを褒め称える詩や祝い言葉が見られる。写本7は *arbai metü aduyun delgeretügei, ajini morin delgeretügei, üljei quday-un čoy badaraču, zambutib-un čimeg bolqu boltuyai* (大麦のようにウマが繁栄するよう、駿馬が繁栄するよう、幸福が栄え、世の飾りになるよう) という祝い言葉が書かれて終わる (同前 187)。モンゴル人のウマへの深い思い入れが表されており、かれらのウマに対する観念の一端が示されているのである。

本稿においては、主に写本4が扱われているが、写本4は全部で18頁あり、表裏に文字が書かれ、1から18まで番号がつけられ、表面がaと、裏面がbと、次々と表記されている。たとえば、第1頁の表面は1aと、裏面は1bと示され、最後の頁は18aである。各頁ごとに10-21行の文字が書かれ、行数は不均等である。写本4のタイトルは『動物の生まれつきの宝に良し悪しの2つあるのを鮮明に区別する略経』と称される。ところで写本4の8a頁では *siker amta kemekü čiqula tobči neretü tobči bülüg* (飴の味という重要な簡章) と書かれ (同前 110), 18a頁の最後行では *morin-u erdeni-yi uqaqu siker amta neretü bülüg ene bui* (ウマの宝を分かる飴の味という章はこれである) と示されている (同前 119)。したがって写本4

のタイトルは飴の味という章であるか、それともほかの経書であるかは、はっきりと分かっていない。またこのタイトルからは写本4の書かれた目的も明確されている。つまりウマの生まれつきの条件や特徴を見分け、その良否を見極めようとしている。

写本4は全体的に誤脱が少なく、文字が明瞭であるが、判読できない個所がいくつかある。また5aから8a頁までの部分では書かれた内容が混乱している。内容が重なったり、ある項目がきちんと解釈されていないなどである。これは写本4の著者が自分の必要な内容を取り出したり、分かりにくい部分を除いたり、また通合のよいように補足したりしたのではないかと考えられる。

またある項目については具体的に解釈されず、他の文献を参照するように提示している。たとえば、歯と筋を『モンゴルの大特徴』を参照するように（同前 107）、頭の11の特徴、歯の11の特徴、肉の30種の勇敢な特徴、上の3つの隆起、下の4つの杖などを『モンゴルの特徴』を参照するように指示している（同前 108）。しかしこの2つの文献があるという情報のみが伝わり、具体的な内容については完全に明らかにされていない。

以下、逐語訳を試みるが、説明されなかった項目については『ウマの特徴』の他の写本から参照できる内容を注として取り入れている。またある言葉が落とされたり、綴り語が欠けたりして意味の通じない部分については可能な限りに筆者が補い、（ ）に入れて示すことにした。

特に写本4ではウマの歯について実に詳細な識別が行われ、数多くの名付けられた歯があげられる。それらの名付けは歯それぞれの特徴によるものが多く、つまり歯の持つ特徴はそのまま歯の名に化し、混乱されやすいものばかりである。歯それぞれが区別されるように、歯個々の名付けを直訳し、名称としての意味を示すように「 」に入れている。

## 二 『ウマの特徴』の写本4の翻訳

1a ダラナタヤ仏に跪拝しよう。

性格の最高とは均等にあり

慈心たるすばらしい仏

次にゲンガ・ニンボをはじめとする仏たちは

わが心を喜ばせる

動物の生まれつきに具わっている宝には、その良し悪しの両方が存するため、鮮明に区別する経書を書こう。

賢くて良いウマの特徴を識別するときには、普通2つの見分けかたがある。全体的な見分けかたと部分的な見分けかたとの2つである。全体的な見分けかたによって、天のウマ、地のウマ、鳥類のようなウマ、草食獣のようなウマ、肉食獣のようなウマ、火の性質（のウマ）、水の性質（のウマ）、気の性質（のウマ）という8種で識別される。部分的な見分けかたによって、頭の特徴、蹄の特徴、尻尾の特徴、声の特徴、食べ方の特徴、水の飲み方の特徴、足跡の特徴、歯の特徴、筋の特徴、全身の特徴という10種で識別される。とくに識別する際、6つ<sup>5)</sup>、または20のたくましい特徴を有し、異なる特徴を具えたウマ

1b それぞれであり、今そのすべての説明を書こう。天のウマとは飛び跳ねたライオンのように胸がよく、前足が長く、頭が高く、鼻が大きく、背中が四角で、すらりとしている。地のウマとはカエルに乗ったようで、肉付きがよく、4本の足が短く、背中がずんぐりし、怠け者である。鳥類のようなウマとはすらりとしたまっすぐな歩き方であるが、ナーダム<sup>6)</sup>の現場では臆病なためよくない。草食獣のようなウマとは驚きやすく、頭がまっすぐで高く、目が赤く、よく瞬きをし、歩くときは耳をよくぴくぴくさせ

る。肉食獣のようなウマとは怠け者で、目が赤く、速く呼吸し、頭が低く、放尿するときは足を高く上げ、口をよく開け、怖がらなくて勇敢である。曲がった前足は短く、後足が長ければ火の火である。まっすぐに前足は短く、後足が長ければ水の火である。ゆったりとした後足は短く、前足（が長ければ）水の水である。曲がった後足は短く、

2a 前足が長ければ火の水である。まっすぐに後足は短く、前足が長ければ気の水である。まっすぐに4本の足は均等であれば、気の気である。曲がった4本の足は均等であれば、水の気である。このように8種で識別される。見分ければ（ウマの）頭には6種類ある。つまり肉食獣の頭、カエルの頭、ヒツジの頭、ウサギの頭、麝香鹿の頭、シカの頭との6種である。肉食獣の頭とは唇と口が大きく、鼻面に割れ目があり、目が赤く、目つきが凶暴で、目の大きさが中ほどである。カエルの頭とはすこし短く、額が大きく、目が大きく、舌の寝床（口腔底を指す）が広く、口が大きく、鼻翼が大きい。ヒツジの頭とは下げた頭で、額が大きくて長く、頭骨のつなぎ目が太く、目が大きく、舌の寝床が広く、眉骨が大きく、口と唇が大きい。ウサギの頭とは目が大きく、鼻面が丸々として、頭が小さく、耳が大きく、顔が大きく、舌の寝床が広い。

2b 麝香鹿の頭とは小さくてすこし長めの頭で、丸々とした目があり、耳が大きく、口と鼻がきれいである。シカの頭とはまっすぐに、鼻が大きく、肉と骨の間がはっきりとして、舌の寝床が小さい。これらのうちカエルの頭とウサギの頭との2つは貴重である。（ウマの）蹄には6種類ある。野生ロバの蹄、ホラガイのような碗、肉蹄、トリの爪、ヤクの蹄、速い爪との6種である。野生ロバの蹄とは丸々として、蹴爪が小さく、先がひっくり返したようで、踵が厚く、蹄先が薄く、蹄底が深く、外縁が鋭い。ホラ

ガイのような碗とは前述の蹄と似ているが、蹴爪が細長く、蹄底は痩せこけて周りが高くなり、

3a 蹄先がゆったりとしている。肉蹄とは偏平で短く、楕円のように、蹄先が長く、踵で地面を引きずり、蹴爪が大きく突き出ている。トリの爪とは薄くて幅広く、とても短い蹄で、蹴爪が大きく突き出、歩くときは踵で地面を引きずる。ヤクの蹄とは根元が太くてまるで大きな蓋をしたように、蹄先が鋭く、すこし楕円のようなのが丁度よく、踵へと広がり、蹴爪が深く痩せこけている。この蹄は貴重な蹄だとされている。速い爪とはトリの爪と同じく、高く、蹴爪が空に痩せこけている。肉蹄とトリの爪との2つの蹄は悪い蹄だといわれている。尻尾の特徴とは太くて短く、しなやかな尻尾が貴重であり、細くて長く、しなやかではない尻尾は下等であり、換えると中等になる<sup>7)</sup>。声を見分けるとき、雲雀の鳴声のように高く、はずみがあるのは貴重だという。

3b 禿鷹の鳴声のように中ほどのはずみがあるのは中等だという。ブタの鼻から出したような鳴声は悪くて下等だという。食べ方を見てみると、食べる量が多く、糞が少なければ貴重であり、食べる量が少なく、糞が多ければ下等になり、換えれば中等だと分かる<sup>8)</sup>。水の飲み方を見てみると、水をすこしずつしょっちゅう飲めば、トリのようによい。水を3回に分けて飲めば、トラのようによい。2回に分けて飲めば、野生ロバやシカのように中等になる。水を1回でいっぱい飲めば、ラバやウシのように悪い。心掛けてやるのがよい。足跡を見分けると、蹄縁以外の部分の跡がはっきりではなく、踵の跡がぼんやりしていれば（貴重である）。前足の跡より後足の跡がいくつかあれば中等である。全部4本の



4a 足の跡がはっきりとしているが、後足の跡は前足の跡に及ばなければ、下等である。歯<sup>9)</sup>と筋<sup>10)</sup>については『モンゴルの大特徴』を参照せよ。全身の特徴には7つの重要、6つの花、6つの性質、20の好み<sup>11)</sup>、喩え言葉<sup>12)</sup>、肉の形<sup>13)</sup>、僅かなしるし<sup>14)</sup>、吉凶の区別<sup>15)</sup>という8つの項目が含まれる。7つの重要とは、後頭部が重要で、しま模様のトラの口が重要で、ヘビの瞳が重要で、強いライオンの鼻が重要で、頑丈なシカの脛が重要である<sup>16)</sup>。また必要な花とは、心臓の花は目なので、目は赤くて大きく、凶暴な目つきが必要である。肺臓の花は鼻なので、鼻翼が広いのは必要である。肝臓の花は舌なので、

4b (舌が) 小さく薄いのは必要である。脾臓の花は唇なので、(唇が) 柔らかいのは必要である。腎臓の花は耳なので、(耳が) 薄くて速く動かすのは必要である。子宮の花は口なので、とても大きい口は必要である。6つの性質が具わった特徴だといえ、頭と蹄は金から生じ、硬くて速い性質を持つ。首は木から生じ、三角で薄い性質を持つ。胸は火から生じ、厚くて高い性質を持つ。腰は気から生じ、大きくて丈夫で丸い性質を持つ。尻是水から生じ、高い性質を持つ。筋肉は土から生じ、健康な窪んだ性質を持つ。シダム・マイリ仏に跪拝しよう。バンディダ仏から歯が生まれる<sup>17)</sup>。2頭の2歳ウマから生まれる<sup>18)</sup>。歯は<sup>19)</sup>

5a 体が全体的に軽くて細く、4つの蹄は野生ロバの蹄のようで、脛はシカの脛のようで、上半身は発情した種ラクダの体のようで、頭の形はオオジカの頭のようで、目は凶暴なオオカミの目のようで、頭の11の特徴、歯の11の特徴、4本の足の特徴、3つの隆起の特徴がすべて具わる<sup>20)</sup>。歯は「生えた野生ロバ」<sup>21)</sup>であり、犬歯は「崖が険しい」<sup>22)</sup>であればつりあう<sup>23)</sup>。老いた牝ウマ(13歳以上を指す)から生まれた当歳ウマの特徴はこれであ

る。毛が濡れ、鼻が薄く、目には睫がなく、眼窩に肉がなくてよいが、冬にはよくなるだろう。小腸の欠陥で悪く、眼窩の欠陥で風に（悪く）、睫の欠陥で大勢の受けが悪いだろう。中年の牝ウマ（6-12歳のを指す）から生まれた当歳ウマを確認する特徴はこれである。目が突き出て、鼻が厚く、眼窩とタテガミの毛が濃く、

5b 睫が多いため、冬と夏は均等によい。5歳牝ウマから生まれた当歳ウマを確認する特徴はこれである。上睫が疎らで下睫が9本あり、頭が均等で肉付きがよく、鼻面が短く、小腸が長く、尾骨が長い。それが欠陥となり悪くなるだろう。地面の上りへと向って横たわった牝ウマから生まれた当歳ウマを確認すると、前足が短く、後足が長い<sup>24)</sup>。また種ウマの teg（零の意味）が見つからなければ、牝ウマは ÷ig（点の意味）になるといわれる<sup>25)</sup>。頭の11の特徴、歯の11の特徴、肉の30種の勇敢な特徴、上の3つの隆起、下の4つの杖などは『モンゴルの特徴』を参照せよ<sup>26)</sup>。エリチ（子を産まないの意味）牝ウマの特徴はこれである。小腸が大きく、尾骨が長く、前髪が僅かで、束尾の毛が疎らで、腰は鷺の翼のようで、ウシのような尻があり、シカのような脛があり、鼠径が大きく、胸腔に腹があり、頭は老いた野生ロバの頭のように、第一頸椎が1指尺である。右側に横たわった牝ウマから生まれた当歳ウマは左半身が引き締まり、タテガミはその側へと垂れる。日中<sup>27)</sup>に牝ウマから生まれた当歳ウマは体の全体が

6a 細く、毛が濡れ、目つきが鋭い。夜に牝ウマから生まれた当歳ウマは視力がよくない。牝の当歳ウマを生む牝ウマの特徴はこれである。尾と尾根の剛毛が均等で、鼠径が四角で太く、タテガミが濃密である。肉の30種<sup>28)</sup>はどうかといえば、鷺の骨で囲んだような爪が3指尺であっても、石や水の場所で勇敢である。骨と（筋肉）の2つが同じく、ワナの弦のよう

である。筋が広がり、角が勇敢で、ひざが強い。人の額のように（あれば）よく、「匙」<sup>29)</sup>のしるしがあればひざは勇敢である。肩と肩甲骨の特徴はどうかといえば、鷲のような肩、黒肉と肩の後ろ部分の肉付きがよければ勇敢で、黄鴨のような胸骨、隼のような胸肉が勇敢で、首が3指尺で、第一頸椎が1指尺で、また人の首や盤羊の首のようであれば勇敢である。歯の黒窩（咬み合い面を指す）には6つの赤い石が現われれば、歯と外形との2つがつりあう<sup>30)</sup>。ライオンのような外形がつりあう<sup>31)</sup>。上歯には

6b 「努め」「烙印」「錐のような簪」「明り」「ヘビ」「そそっかしい」「並び」「隼の嘴」「長いヘビ」と名付けられたしるしが10ある<sup>32)</sup>。下歯には「梯」「囲み」「とさか」「地の丸い石」「赤い暗流」「気」「歪み」「オリオン壁」「つなぎ」と呼ばれたしるしがある<sup>33)</sup>。上歯のしるしは速さの現れであり、下歯のしるしは長距離に適応するかどうかを示し、「とさか」のしるしは中等である。（ウマが）落ち込んだしるしはこれである。秋にいつもわくわくさせれば、歯は根元からぶち折れる。逆睫毛となり、目が窪み、鞭打つと右上歯がぶち折れる。歯と目は秋によるものである。毒にはまったウマは歯が黄色っぽくなり、黄色い垢が落ちる。左側の歯がぶち折れると、春によるものである。（ウマが）疲れ切ったため、歯は全部曲がってぶち折れる。当歳ウマの特徴はタテガミと尻尾の毛が濃く、口ひげがあり、第一頸椎が大きく、

7a 耳が大きく、4つの蹄が鋭く、爪で踏み込み、鼻面が長く、目と眉毛が大きく、眼窩が窪み、いつも体に肉がない。良い品種だと確認する特徴とは、通常体がよく、顔にはっきりとした剛毛が生える。ウマの調教を25日間行なう<sup>34)</sup>。調教する人は、食べ物を食べさせ、飲み水をも体にあわせる。歯は翡翠のような色になり、黒窩に6つの赤い石ができれば、歯と外

形がつりあう。上歯には「努め」「烙印」「錐のような簪」「明り」「ヘビ」「そそっかしい」「並び」「隼の嘴」「長いヘビ」と呼ばれるしるしが10ある。下歯には「梯」「囲み」「とさか」「地の丸い石」「赤い暗流」「気」「歪み」「オリオン壁」「つなぎ」などのしるしがある。下歯のしるしは長距離に適するかどうかのしるしである。「とさか」のしるしは中等で、「オリオン壁」と「梯」「とさか」の2つは硬くて最後まで努力する。聖主の乗馬には宝となる特徴が

7b 36種ある<sup>35)</sup>。額が鉄砧のようで、唇はオオジカの唇のように大きく、臼歯は種ラクダの犬歯のようで、上下歯の隙間の肉が均等であるところには6つの隆起があり、足より後へと太ももには4つの隆起があり、額に3つの隆起があり、両耳には旋毛がなく、歯は拳のように大きく、眼窩はウシのシャーガ<sup>36)</sup>が入れるほどで、2つの太ももと臀部が均等である。歯の付け根に赤い石ができたのをすぐ抜き取れ、(そうしないと)後に悪くなるだろう。6本の割れ目がある「烙印」はよい。気の性質のウマは驚きやすい。「そそっかしい」「並び」と「太い針」<sup>37)</sup>とがよい。「地の丸い石」には節があれば、貴重でよい。「まっすぐな梁」という下歯は長距離にもつとよい。春に気の性質のウマがよく走るといわれている。盤羊のようなウマは春に気が強く、日中には3分量の草と1分量の水をやる。オオカミの

8a ようなウマはよく、草を1分量増やしてやり、目が赤くなると捕まえる。キツネのようなウマは草を3分量でやり、石上に止まった鷹のようになればよく走るといわれる。「短いウシ」<sup>38)</sup>が僅かであり、下歯には「青いカエル」<sup>39)</sup>があり、上歯より下歯がよければ、この歯は「赤みがかった灰色の駅通の歯」<sup>40)</sup>と称される。また孔雀のようなウマは春によいため、水を多めに、草は少なめにやるが、または百位には入れない。地面の上りへ

と向って横たわった牝ウマから生まれる当歳ウマは前足が短く、後足が長い。

飴の味という重要な簡章

内臓の具合を見分けると、心臓の状態が目に見れるため、心臓が大きいのはよい。目の色が赤黒いのはよいが、勇敢で大勢がいても怖がらない。心臓が小さいのは、目が黄色っぽく、眉毛が少なく、額が薄ければ

8b 怖がるため大勢に悪いという。肺臓の状態が鼻翼に見れる。鼻穴が丸々としたのは、肺臓が小さいため（よい。鼻穴が狭いのは肺臓が大きい）ため長距離を走ったり、歩いたりするのに向かない。腎臓の状態が耳に見れる。腎臓が小さいのは良いしである。耳は薄いのがよい。厚ければ、腎臓が大きいと悪いという。肝臓の状態が舌に見れる。肝臓が小さいのはよく、舌の色が黄色っぽい。赤くて厚ければ、肝臓は大きいと、心臓が圧迫され、（ウマは）走らない。脾臓の状態が歯茎に見れる。脾臓が小さいのはよく、歯茎が痩せこけていればよい。歯茎は膨らんでいれば、脾臓が大きいと悪いという。また重要なのは、耳の生え方が細ければ、（ウマは）荒っぽい。耳が鋭いため、怖がるという。耳は両方へ平らでゆったりとして

9a いれば、未亡人の運命だといわれ、戦闘や遠い旅を禁ずる。2つの耳が先へと広がり、窪んでいれば連れが多い。耳は細い形で生えていれば、（ウマは）暴れやすくて怖がる。乗用するときは耳を前後に交差して動かせれば、速く走るしである。どのような耳であれ、耳は下へと垂らしてあれば、前面より避けて驚く。耳はまっすぐで、薄くて長ければ良いしだろう。目の視線を見分けるとき、前面からみれば、左目が低く、右目が高く見えれば、持ち主を換える前兆であるが、そのウマがため息をつ

けば、持ち主が他人に引き取るように頼まれたとき渡すようにいったため、持ち主やウマの群れから離れる前兆である。前面からみるとときには、2つの目で人見知りして見ていれば、強盗に

9b 盗まれる前兆である。前面からみるとときには凶暴で目つきが鋭く、暴れていれば、持ち主が大きい厄にあうため、その年には悪いだろう。黒目がヘビの目のようであれば、大小なる幸運がもたらされる前兆である。黒目より外へと、瞼より裏へと銀の輪のようであれば、身分高い人に幸運がもたらされるが、普通の庶民にはあわないといわれる。2つの目が両側へ傾いたように見えれば、逃れるかまたはよく走れないという。調教するときは、いつも山の頂を見たり、乗用するときは尻尾を振って暴れたりしていれば、走らない前兆である。目はいつも瞬きをし、持ち主のハミがかけるのを好めば、持ち主から離れる前兆である。

10a また目が恋人のように優しい目つきで見て、甘えん坊で人の体に寄ったり、人の肩に頭を置いたりしていれば、大幸運がもたらされるため、大切にすることがある。他人に渡すと持ち主やウマの群れに最悪だといわれる。またウマが走るときには、鞭打つほど走れば、心が広いと多少にかかわらず、長距離を走る前兆である。毛色の縁起がよいとは、鼻面が赤くなくきれいな白毛、油のように輝くきれいな黒毛、肺臓の色のような栗毛、血のような赤毛、さびができたようなきれいな赤褐色、斑の褐色、明るい栗毛、口が白く、斑の黒毛、きれいな赤みがかった栗毛、黒栗毛、きれいな葦毛、鉄のようなきれいな青毛、きれいな赤みがかった白毛、薄黄色などである。これらのウマは戦闘に出馬したり、貴人が乗用したり、

10b 貴人のお供になったりするなどの場合によい。これらの縁起のよい

毛色のほかに、誰にも合う旋毛のよいのは（次のようである）。額に太陽右回りの旋毛があれば、どこでも用事が成功するだろう。後頭部には根元から向き合ったオチル<sup>41)</sup>のような旋毛が2つあれば、みんなに認められるだろう。両肩に太陽右回りの旋毛があれば、持ち主やウマの群れに縁起がよい。（頬）に太陽右回りの旋毛があれば、貴人に縁起がよい。鬣甲にははっきりとした旋毛があれば、大国の旗を握る人<sup>42)</sup>には縁起がよいだろう。仙骨にははっきりとした旋毛があれば、口の福が止まらない（ご馳走にありつく運がある）。胸骨柄に旋毛があれば、どこへ行っても収穫があるだろう。さらにすべての特徴が具わった上、両ひざと両踵にははっきりとした旋毛があれば、大国のハーンの乗馬になるだろう。その呼称は「毛の4つの杖」だという。じっと見られると怒った人のように目つきが悪くなり、右目からすこし涙をこぼしていれば、2つ半の黒白の道のりを往復できる。または持ち主が厄にあう。目に涙がなく、怒った人のように目つきが

11a 悪ければ、1つ半の黒白の道のりを往復できる。または持ち主に（よくない）。舌や口を舐めたり、耳をひくひく動かしたり、またハミを咬むのを好んだりすれば、盛典や戦闘に乗らないはずはない。歯をみるとときには、速く瞬きをし、頭を後ろへと避けていれば、5日間の内に盗まれるのは勿論のことである。歯をみるとときには、持ち主の好きなように見せ、頭を人の体に寄せたり、人の体に寄りながらあくびをしたりすると、ウマの持ち主は貴人に受け入れられ、地位と名誉を得るだろう。ウマを見分ける人にも恩恵となる。乗用するときには右後足がちょっと沈めば、持ち主は口と舌のことになる（喧嘩になるという意味）ため、乗らないほうがよい。左後足がちょっと沈めば、そのウマはもう一頭のウマを連れて逃れる。そうでなければそのウマは病気にかかる。前面からみるとときには、両目が均等にやさしい目つきであれば、持ち主やウマの群れから離れることなく、

良い前兆である。牝ウマは妊娠中に右後足がちょっと沈めば牡の当歳ウマを生む<sup>43)</sup>。このとき牡の当歳ウマを生む牝ウマの特徴とは、細長い体があり、上半身と

11b 下半身が均等でゆったりとして、腹が大きく、皮が薄く、鼻面が長く、タテガミと尻尾が疎らで、臀部の筋肉が広く、秘所がややくぼんで長い。良い当歳ウマを生ませる種ウマとは、タテガミと尻尾が濃く、体は四角な形をし、丈夫で、首には旋毛が多く、体に9つの穴がある。通常みるときには、上門歯には歯の隙間の肉と同じく細い糸のようなしるしが歯茎から歯先まで続けば、「絹の明り」と称される。まっすぐで、速く、きれいな小走りがあり、姿が美しく、特権者のウマだといわれるが、どこへ行っても連れからいなくなるだろう。また通常みるときには、下の6つの歯に充分な気<sup>44)</sup>があり、外へと広がれば、「鉄杖」と呼ぶ。舌の寝床が広ければ「樺の肘」と呼ぶ。この2つのどちらがあっても驚かず、距離の多少にかかわらず走る。また「肉の凹み」とは、下歯茎の裏にへびの目のような黄色いしるしがあり、舌の寝床には僅かな黒い

12a しるしがある。この2つのどちらがあっても、速く走る。幼い頃にはよいが、2、3歳のときに歯茎の先に凹みがあれば、「赤い岸」といい、速く走るのにプラスになろう。また上の奥歯が細長く垂れていれば、「隼の嘴」といい、短くて大きければ「まっすぐな梁」という。下の奥歯は「まっすぐな梁」のようであれば、「とさか」と呼ぶが、走ったり歩いたりするときは驚かない。また下奥歯の表に細いデレス<sup>45)</sup>のような白い骨のしるしがあれば、「渠条」という。また下奥歯の黒窩には数珠のような白い骨のしるしがあれば「余った壁」と呼ぶ。「隼の嘴」は1つの黒白の道のりに速いが、他の特徴がよければ、もっと走るのにプラスになろう。「まっ



すくな梁」の速さは「隼の嘴」に及ばないが、3つの黒白の道のりに驚かない。「とさか」の速さは「隼

12b の嘴」と「まっすくな梁」に及ばないが、当日は驚かず、2日間速歩で走っても痩せない。「梁条」は1つの黒白の道のりを「とさか」のように走るが、うまくコントロールできれば遠くなるほど速くなり、当日は驚かない。「余った壁」はとても速く、1つのベーラ<sup>46)</sup>の道のりに驚かないが、距離の遠さを無理にしていけない。「オリオン壁」とは下門歯の歯茎が下へと広がった。「オリオン壁」の短距離を走る速さは「余った壁」に及ばないが、最後まで努力するのは同じである。「矢のようなカラス」とは上の門歯に歯茎へと割れ目があり、先まで届かないが、2つの黒白の道のりにとても速く、ウサギや黄羊に追いつくだろう。「ノロジカの荷台」というしるしは腰の凹みに2つの細長い骨があるが、他のしるしがよければもっとプラスになろう。一頭で1つの黒白の道のりを速く走るだろう。いつも足が滑らず、

13a 蹄の病気にかからないだろう。通常、歯の「赤い暗流」とは、下歯の縁から黒窩へとメイクを塗ったような赤いしるしがあるが、1つの歯にあれば5、6百頭のウマの中で5着<sup>47)</sup>に入る。2つの歯にあれば千頭のウマには優勝するだろう。「黄色い暗流」とは、下歯の縁から黒窩へと黄色っぽいしるしがあるが、2、3の黒白の道のりに速く、他の特徴がよければ、これがもっとプラスになろう。「紋様の明り」とは下門歯の黒窩に1本の小さく黒いしるしがあるが、硬く陰しい場所に適し、2つの黒白の道のり(に速い)。「緑の壁」という上の2つの奥歯の

13b 1つには歯茎まで緑の垢がくっついたため、そのように称されたが、

驚かなくて速く走る。5, 6の黒白の道のりに驚かない「白っぽい銅」というしるしは上歯の表が白っぽい。「矢のような黒木」とはとても速く, 7つの黒白の道のりで驚かず, 寒暖によく耐える。「白い真珠」と呼ぶのは, 上歯の表に白っぽい真珠のような骨のしるしがあるが, 放すと驚き, うまくコントロールできれば8つの黒白の道のりに乗れる。貴人には縁起がよいといわれる。「急流の渦」と呼ぶのは, 上歯の表に細く白い旋毛のようなしるしがあるが, このしるしは上の4つの奥歯に限って現れる。中ほどの速さで5つの黒白の道のりを走るが, 貴人には縁起がよく, 硬い。またウマの妨害だといわれている「青いシャーガ」と称されたしるしがある。

14a 上の6つの歯に横の凹みがあれば, 「ラクダが寝た」と呼ぶ。横たわって窪んでいるのが「ヘビが入った」という。1つの歯に現れると, 「鞭が落ちる」といい, 2, 3の歯に現れると, 「鞍の腹帯や尻がいが切れる」といい, 落馬の一因だと考えられる。5, 6の歯に現れると, 競馬に出すのはよくなくて, 持ち主にもよくないという。「暗渠」というしるしは上歯の表に細く小さい凹みが3, 4あるが, 2つの黒白の道のりを中ほどの速さでやや走り, 幼いウマにはよい。通常, ウマの歯には7種類あるが, 「野生ロバの歯」「ラクダの歯」「ヒツジの歯」「小麦の歯」「ブタの歯」「ウシの歯」「野生ウマの歯」の7種である。「野生ロバの歯」とは根元と先が均等に大きく, 厚く長い歯である。「ラクダの歯」とは長さが同じで, すこし薄く, 硬く白い歯である。「ヒツジの歯」とは

14b 根元が細く, 長く, まっすぐな白い歯で, 頭がない錐のようである。「小麦の歯」とは白い斑があり, 刀のような鋭い歯である。「ブタの歯」とは曲がらず, まっすぐで, 鋭くて薄く, 中ほどの長い歯である。「ウシの

歯」とは四角な形があり、表面に3つの凹みがあり、短く黄色い歯である。「野生ウマの歯」とは厚くて長く、先にはすこし凹みがあり、鈍く黄色い歯である。この7種の歯をさらに細かく区別すれば（次のようである）。「生えた野生ロバ」「曲がった野生ロバ」「短い野生ロバ」「種ラクダのような野生ロバ」「丸々とした野生ロバ」「細い野生ロバ」「野生ロバの小麦」「秘密の野生ロバ」「突き出た野生ロバ」「親しい野生ロバ」「普通の野生ロバ」「ツルツルとした野生ロバ」「大きく長い野生ロバ」の

15a 13種ある。「生えた野生ロバ」とはオレンジ色で白い爪のようで、すこし広がっていて、先と根元が均等で、長く厚い歯である。「曲がった野生ロバ」とは長くて厚く、裏へ窪んだ歯である。「短い野生ロバ」とは短くて四角で、厚く白い歯である。「種ラクダのような野生ロバ」とは円形で、厚くてツルツルとして、白く大きい歯である。「丸々とした野生ロバ」とは細くて円形で、すこし隙間がある歯である。「細い野生ロバ」とは「ヒツジの歯」のようにすこし細めの根元があり、厚く、長く白い歯である。「秘密の野生ロバ」とは四角の形があり、すこし短く、鋭く白い歯である。

15b 「野生ロバの小麦」とは「小麦の歯」より長くて厚く、「野生ロバの歯」より鋭い歯である。「突き出た野生ロバ」とは歯の真ん中がすこし凹んで、ザラザラとして、厚く、長さが中ほどで、口と同じであるが、速い。「親しい野生ロバ」とは「ウシの歯」より長く、きれいな形があり、先がゆったりとしていて、根元がすこし細くて鋭いが、速くてよく走る。「普通の野生ロバ」とは「ヒツジの歯」より根元が広く、「ウシの歯」よりやや長くて薄く、きれいな鋭い歯である。「ツルツルとした野生ロバ」とは厚く、すこし短く、ツルツルとして、広がった歯であるが、硬くてやや遅

い。「大きく長い野生ロバ」とは厚くて大きく、長く、赤色の斑がある歯だが、貴重な外形ではなく他の小さい体に重くなる<sup>48)</sup>。「突き出たラクダ」とは薄くて白く、軽く、斑があり、長い歯であるが、

16a どのような外形にも適し、小さくて細い体に重くなる。「垢付きの黄色いラクダ」とは白っぽい垢がくっついて、短い歯であるが、速く走る。「大きいヒツジ」とは根元が細くて長く、きれいな白い歯で、先は錘で刺したようである。(「小麦のヒツジ」とは)「小麦の歯」より細くて短く、紋がなく、白くて円形で、中ほどの長い歯である。「短いヒツジ」とはすこし突き出た白い歯である。「見通したヒツジ」とは中ほどの長さで、しるしがなく、ツルツルとした白い歯である。「親しいヒツジ」とは根元が細く、先が厚く、よくきれいな歯である。「紋様のヒツジ」とは白色で細かい紋があり、小さくきれいな歯である。「長い小麦」とは白い斑があり、長く鋭い歯であるが、(ウマが)老るときにはこの歯が先に老る。「短い小麦」とは「ウシの歯」より長く、凹みがない。「細い小麦」とは小さくて広がっていて、白い紋様がある。「斑の小麦」とは鋭く大きい歯が、速い歯である。「見通した

16b 小麦」というのは「野生ロバの歯」より細く、大きく長い歯である。「ブタの歯」には、形が四角で小さな凹みがある「まっすぐなブタ」という歯、小さな凹みが多い「大きいブタ」という歯、短くて四角の「黄色いブタ」という歯、青っぽい垢がくっついて、厚く大きい「垢付きのブタ」という歯の4種がある。この4種は短い歯である。「ウシの歯」は同じ形をした短い歯であるが、垢、凹み、色、形などを結んで名付けている。「大きいウシ」とは3つの凹みがあり、厚い歯である。「短いウシ」とは短くて四角で、小さい歯であるが、速い。「見通したウシ」とは模様がなく、

鈍く黄色い歯である。「垢付きのウシ」とは青っぽくて厚く、黄色い垢がくっついた。「溝のウシ」とは真ん中に1本の溝がある。「紋様のウシ」とは先に条紋があるが、短距離に速い。「そそっかしいウシ」とは2つの門歯の隙間が大きい、活気がある。「牛黄のウシ」とは歯の根元に薄くてきれいな黄色い垢がくっついている。これらはすべて走る歯である。「ツルツルとしたウシ」とは鈍く黄色い歯であるが、すこし硬い。

17a 「突き進むウシ」とは尖っていて、形が四角で、上下歯には均等な気<sup>49)</sup>があるが、長距離を何回か走っても驚かない。「四角な厚いウシ」「ツルツルとして、黄色っぽい垢付きのウシ」「鈍くて突き出た黄色いウシ」「幅広いウシ」との4つの歯は相当に速い。外形と筋がつりあう<sup>50)</sup>。「野生ウマの歯」には3つある。「細く鈍い野生ウマ」とは長距離に速い。先に3つの凹みがあるが、悪い。「厚く大きい野生ウマ」と「黄色い野生ウマ」とは同じく百頭に走る。「長いヘビ」とは上の門歯に歯茎の真ん中から先まで9つの凹みがあるが、中ほどの速さで6つの黒白の道のりを走る。「細いヘビ」とは上奥歯の外縁に長く細い凹みが9つある。「矢のようなカラス」のように速く、うまくコントロールできれば5つの黒白の道のりを速く走る。「暗渠」というしるしは上歯に細く小さい凹みが3、4あるが、2つの黒白の道のりを中ほどの速さで走り、幼い頃にはよい。「野原の青いカエル目」とは、上の奥

17b 歯にはカエル目のようなしるしがあるが、何回かの長距離を走り、とても硬い。「細いヘビ目」とは下門歯の黒窩に黄色い輪のようなしるしがあるが、5つの黒白の道のりを速く走る。「ねじの頭のような黒み」とは下の門歯に輪のようなしるしがあるが、幼いウマには最もよく、成年のウマにはプラスになろう。「アリの切れ」とは下門歯の黒窩に割れ目が

あるが、幼いウマにとってもよく、成年のウマにはプラスになろう。「楡柱」というしるしは下歯に骨の凹みが3，4箇所あるが、寒い湿気の日にはよく、4つの黒白の道のりを走り、太陽の暑い日は2つの黒白の道のり以上走らない。「永久の花」とは、下歯の裏に2本の細い凹みがあるが、7つの黒白の道のりを走り、とても硬い。下の4つの奥歯には4つの「匙」と、4つの「囲み」のしるしがあれば、4つの黒白の道のりを走る。「匙」は

18a 速い。「隣の黄色い木」とは上の奥歯に木のような黄色いしるしがあるが、速足で2つの黒白の道のりを走る。「張り網」というしるしは上の奥歯に横の細い凹みがあるが、3つの黒白の道のりを走り、調教がよければもっと走る。「肉錐のような簪」は2つの黒白の道のりを走る。「骨錐のような簪」は長距離を数回走れる。「竹の杖」とは上の門歯に先まで薄く黄色い垢がくっついているが、速く走る。1つの歯にあれば1つの黒白の道のりを走る。いくつかの歯にあれば、その歯の数と同じ数の黒白の道のりを走る。もし6つの歯にあれば、6つの黒白の道のりやもっと長距離を走る。「漆の机」というしるしは下門歯の両端に凹みがあり、真ん中は真珠のようにツルツルとして、黄色っぽいが、7つの黒白の道のりを走り、硬い。「捧げ花」とは歯茎に先まで2，3本の青い筋があるが、幼いウマにはとても貴重で、成年のウマにはプラスになろう。「斑の扉」とは上門歯の表に青い斑があり、真ん中はツルツルとして、白色であるが、3つの黒白の道のりに速く、何回かの長距離を走る。「斑の暗流」には「黄色みがかった斑」と「赤みがかった白色」との2つある。「黄色みがかった斑」は1つの黒白の道のりに速い。「赤みがかった白色」は4つの黒白の道のりに速い。ウマの宝を分かる飴の味という章はこれである。

### 三 ウマの見分けかたに関する考察

以上のように写本4の全訳を提示したが、その内容は『ウマの特徴』の他の写本にも言及されるのと同じく、ウマの外観にある特徴を審査する部分と、ウマの調教に関わる部分との2つに大きく分けられる。ところで写本4ではウマの外観に関わる内容が圧倒的な比率を占め、ウマの調教に言及した部分はそれに対照できない短いものであるため、ここでは扱わなかった。

モンゴル遊牧民のウマを選定する基準を良いウマの見分けかた、ウマを動物になぞらえる見分けかた、ウマの秘密が分かる見分けかた、縁起のよいウマの見分けかたの4つの点から考察する。

#### 1 良いウマの見分けかた

モンゴル遊牧生活においては、ウマの乗り物としての役割が基本に置かれ、さまざまな利用目的に応じたウマの選定が重視される。ウマの外観、内臓、品種によって、ウマの良否を見分け、生活環境、生産労働におけるその利用価値を最大限に引き出そうとしている。

##### 1.1 外観による

写本4では外観によってウマの良否を見分けるのは最も基本的な見分けかたとして示されている。つまり写本4の冒頭に書かれたように、ウマの外観にあるべき全体的な特徴を総合的に見分けることと、身体部位の特徴を部位別に見分けることの2つのやり方が活用されている。

まずウマの外観が全体的に識別され、天のウマと地のウマとに見分けられる。こうしたモンゴル人の世界観に基づいて見分けるのは写本9にも見られる。すべてのウマが天と地と、その中間の3区間に分けられるという。天の駿馬は太陽と月が透き通ったようなウマである。中間の駿馬は虹のよ

うに美しく、心を楽しませる。地の駿馬はカエルのように四角で短く、口が大きく、額が広く、背中が平らである（同前 201）。また五行によって火、水、気の性質を持つウマと識別され、火の性質のウマは上り坂に適し、水の性質のウマは下り坂に適し、気の性質のウマは両方に適すると、どのような地形に適するかが強調される。さらにウマは金の頭、木の首、火の胸、気の腰、水の尻、土の筋肉などの6つの元素を持てばよいと見なされている。こうして五行に基づいて全体的に見分けるのは他の写本にも見られる。写本1では火、気、水、木の性質のウマをどのように調教するかがあげられ（同前 18）、写本2は頭が鉄なので、肉がないのはよい。4つの脛が水なので、まっすぐで長いのはよい。首が木なので細長いのはよい。胸が火なので、ゆったりしたのはよい。肋骨が気なのでまがっているのはよい。尻が土なので、腰が広くて鷹の翼のようであればよいと、ウマの身体部位が構成された元素によってその良否まで見分けている（同前 51）。そして他の写本では全体的な見分けかたによって特定な名称がつけられた数多くの良いウマがあげられる。写本1では「大きな」<sup>51)</sup>「速くきれいな」<sup>52)</sup>という6頭の駿馬があげられた（同前 16）。同じく見極められた駿馬は写本2に13種、写本5に13種、写本7に17種それぞれ述べられている（詳しさは略する）。これらの駿馬には良い特徴が多く具わっているのである。

次に部分的な見分けかたによって、頭、蹄、歯などの身体部位の特徴と鳴き声、食べ方、水の飲み方、足跡などのウマの動作それぞれの良否が明らかにされている。これらの良い特徴が一頭のウマに多く具われば具わるほどそのウマは良いウマに近いとされる。写本6では13の大きい、9つの長い、6つの細い、9つの広い、5つの短い、3つの高いというようにウマの身体部位のそれぞれの大きさ、長さ、広さ、太さ、高さなどの状態を数字と組み合わせ<sup>53)</sup>、系統的に良いウマを見分けている。写本2でも同じ



く見分け、大同小異である<sup>54)</sup>。ともにウマの身体部位の状態が重要なポイントとして審査され、とくに数字と合わせるのはモンゴル人の数字のシンボリズムをも表わしている。「3, 4, 5, 6, 9」などの数字は縁起がよいしるしとされている (Sečenmǎngke 2000: 127)。

またウマの身体部位の状態がその性能の表徴としても重視される。写本5では額と眉骨が厚いのはウマが勇敢で、多少にかかわらず走る。鼻面が長いのはウマの心が広く、長距離に適し、大勢を怖がらない。首が長いのはウマの競争力が強い。前半身が高いのは下り坂に適し、前半身は伸びていれば上り坂に適し、体つきが均等であれば険しい地形に適するという (Lubsangbaldan 1978: 139)。モンゴル人の生活用途に適応されるウマの個体に対して鋭く観察しているのがよく読み取れるだろう。

## 1.2 内臓による

写本4ではウマの内臓具合がそのスピードなどの性能に影響することが注目され、内臓の状態からウマの良否が見出されている。内臓の具合は外観に、しかも頭の各器官に現れると見なすのは写本4のみならず、『ウマの特徴』のいくつかの写本にも言及されているが、写本4と比し、写本1, 2の内容を表に提示する。

表によると、この3つの写本では同様に、ウマの内臓の大きさはその走行性能を支える重要な要素で、心臓が大きく、ほかの内臓が小さければ、ウマはよく走る。一方、心臓が小さく、他の内臓が大きければ、ウマは走らないと、内臓の大きさがウマの性能と深く関わったと見なされている。

またこの3つの写本ではともに頭に集中する各器官が注目され、その形、色、大きさの状態によってウマの健康状態、性質などをはかろうとしているが、改めて写本4は内臓の花として耳、目、鼻、舌、歯、口の6つを取りあげ、その必要性を強調している。実に子宮は内臓に含まれないが、その状態も外観に現れるとされ、大きい口が重視されている。これらの花に

表 ウマの内臓良否と走行性能との関係（同前 22, 55, 111）

内大外性写 臓小観能本 しるし		写本1		写本2		写本4	
		外観に現れる しるし	性能	外観に現れる しるし	性能	外観に現れる しるし	性能
心臓	大	目が赤黒く 目つきが鋭く	よい 大勢に 驚かない	目が 赤黒く	大勢の中に 勇敢 よい	目の色が 赤黒く	よい, 勇敢, 大勢 に怖がらない
	小	目が 黄色っぽく	臆病 大勢に悪い	目が 白っぽく	臆病 大勢に悪い	目の色が 黄色っぽく	臆病 大勢に悪い
肺臓	大	鼻翼が狭く	長距離に驚き やすい	鼻翼が狭く	悪い走れない	鼻翼が狭く	悪い
	小	鼻穴が広く 丸々とした	よい	鼻翼が 丸々とした	よい	鼻孔が 丸々とした	長距離を走らせ ない よい
腎臓	大	耳が厚く 柔らかく	長距離に驚き やすい	耳が厚く	走れない	耳が 厚く	悪い
	小	耳が薄く硬く	よい	耳が薄く	よい	耳が薄く	よい
肝臓	大	舌が褐色で 腫れたよう	心臓を圧迫し, 走りを妨害	舌が厚く 赤く	悪い 走れない	舌が厚く 赤く	心臓を圧迫し 走れない
	小	舌が小さく 白色 痩せた	よい	舌が小さく 白っぽく	よい	舌が 白っぽく	よい
脾臓	大	菌茎が薄く 腫れた	悪い	菌茎が厚く	悪い	菌茎が腫れた	悪い
	小	菌茎が白っぽ く痩せこけた	よい	菌茎が痩せ こけた	よい	菌茎が痩せこ けた	よい

よって内臓の具合を把握し、ウマの良否を見極めようとする同じ意味が反映されている。ところで写本1には大腸の具合も外観に現れるとされている。大腸が小さいのは、腰と胸骨の間が狭いためよい。大腸が大きいのは腰と胸骨の間が広いいため悪いという（同前 22）。

外観の状態とくに頭に集中する各器官によって内臓、子宮などのウマの体内の具合が明瞭にされ、さらにウマの良否や性能が判断されている。一方、頭の各器官の果たす働きが注目され、ウマの頭に対するモンゴル人の特別な観念が込められているのである。

### 1.3 品種による

写本4では良いウマの選定が当歳ウマの頃から始まるとされ、良い当歳

ウマに具わる体、鼻面、目、耳などの特徴が示されている。写本1では駿馬となる当歳ウマには幼いときに跳びネズミのような形があり、子ウシのような鼻面があり、突き出た目があり、ヤギのような耳があり、子ウシのような尾が短く、腰と肋骨の曲りが太ももより外へ見え、4本の足で力強く踏むなどの良い特徴が具わるという（同前 18）。ともに同じ身体部位の特徴を見分け、当歳ウマの良否を審査している。

また良い当歳ウマを生ませる種ウマと牝ウマに対しても外観の特徴の審査が強調される。特に牝ウマの場合、牡の当歳ウマや良い当歳ウマを生む牝ウマの特徴があげられたとともに、牝ウマの年齢、妊娠中の状態、出産時期、出産の際に体を横たえる方向、後足の様子などが実に細かく観察される。それによって生まれてくる当歳ウマの良否を見決めたり、その性別を判明したりしている。

種ウマ、牝ウマの外観の特徴を見分け、その品種を重視するのは他の写本にも共通する。写本7では種ウマとは眉毛が大きく、脛に5、6本の毛があり、胸と胸骨柄がゆったりとして、膝が丸く、目が丸々として、尻が盛ったようで、3歳の時に弱く、4歳のときに強くなり、蹄が大きく、耳が短く、鬣、後頭部、眼窩、首に旋毛があるという。牝ウマとは頭が大きく、牝シカの耳があり、腹が大きく、尻に肉がなく、乗用するときは速足で、蹄が大きく、「ウシの歯」があり、鼻が大きく、臀部が広く、乳の出が遅いという（同前 186）。写本4と同じく外観の特徴が示され、同じポイントが重視されている。

品種の重視はモンゴル遊牧生活において家畜の生産性を高め、衣食住生活の需要を満たすに効率の良い手段である。モンゴル遊牧民は家畜の品種の重要さを認識し、種畜と母畜の選定を真剣に行なってきた。もちろんウマについても例外ではなく、それに関わる経験や知識が伝承されて実際に活用されている。たとえば『牧業者への助言』では身体部位の特徴が列挙

され、種ウマと牝ウマとが詳しく選定されている (Sambuu 1945: 158, 164)。良いウマの選定にも品種の重視に基づくやり方が活用されているのである。

外観の特徴によって見分けるのは当歳ウマ、種ウマ、牝ウマなどの年齢別にも適用され、ウマ一頭一頭、さらにすべてのウマが良いウマであることを期待し、遊牧生活における合理性を重視するモンゴル人の意識が現れている。

上述のようにウマの外観、内臓、そして品種を総合的に見分けることによって、良いウマには写本4にあげた聖主の乗馬となる駿馬のように多くの良い特徴が具わるのである。モンゴル遊牧民はウマを知り尽くし、生活においてそれぞれの用途に応じるウマを使役し、その完全利用を果たし、自分の生活、生産を順調に進めてきたのである。

## 2 ウマを動物になぞらえる見分けかた

ウマを動物になぞらえて見分けるのは写本4のみならず、『ウマの特徴』の各写本においても最も特徴づけられるものである。数多くの動物がモデルになり、ウマの体つきをはじめとして、頭、歯、蹄、肩、筋、毛、尻などの身体部位、さらに鳴き声、水の飲み方、歩き方などの動作までが動物それぞれの特徴に嵌められている。

### 2.1 ウマの姿形

写本4ではウマの姿形が総合的に識別され、鳥類、草食獣、肉食獣のようなウマなどと区別されている。写本3は龍のようなウマ（額が盛り上がって、目が突き出て、背中が均等で、頭骨が大きく、肋骨が曲がって、首が長く、湿気や雨のときによく走る）、魚のようなウマ（身体が長く、4本の足が短い）をあげている (Lubsangbaldan 1978: 52)。写本8ではすべてのウマがシカ、麝香鹿、魚、カエルの4つの型にはまるように識別され、

型それぞれの特徴が列挙されている。関節が長く、太ももが長く、ひかがみがきれいで、胸骨が大きく、前胸が広く、首が長く、耳が大きく、シカの姿が見える。関節が細ければ、麝香鹿の型となる。腰から背中にかけて肉付きがよく、4肢の関節が短く、背中が長いのは魚の型をした。形が四角で低く、口が大きく、目が大きく、額が広くて大きければ、カエルの型が具わるという（同前 202）。こうして陸上、水中、両生にわたって動物界における種々の動物が原型とされ、ウマの姿形が豊かに特徴づけられている。

## 2.2 ウマの身体部位

まずウマの頭は6種の動物それぞれの頭、耳、口、目、鼻の大きさ、形などの特徴を有する。そのうちカエルの頭とウサギの頭を持つのは貴重なウマであると評価されている。良いウマの頭は全体的に小さいが、大きい目、大きい口、大きい額、大きい耳などが具わるのは重要なポイントとされている。写本2では写本4にあげている6種の頭に牝シカの頭<sup>55)</sup>が加わり、7種の動物になぞらえたウマの頭が示されている（同前 50）。さらに写本6ではウマの頭に6種の動物の特徴、つまりイヌの後頭部、シカの顎、ウサギの耳、トリの嘴、ネズミの目、カエルの額などが具わったら、そのウマは間違いのない良いウマであるとされている（同前 157）。

次にウマの歯が野生ロバ、ラクダ、ヒツジ、ブタ、ウシ、野生ウマなどになぞらえて示されている。これらと同様な歯は写本2、写本5にも見られるが、写本8では上等だとされる「ロバの歯」「野生ロバの歯」「ヒツジの歯」、下等だとされる「トラの歯」「イヌの歯」「ヤギの歯」、中等だとされる「ブタの歯」というように、歯それぞれが3等に分けて判定されている（同前 202）。

そしてウマの他の身体部位にも多くの動物の特徴が見られるとされる。トリの爪、鷲の爪、野生ロバの蹄、ヤクの蹄、トラの口、ヘビの瞳、ライ

オンの鼻，シカの腮，シカの脛，種ラクダの上半身，種ラクダの犬歯，オオジカの頭，オオジカの唇，オオカミの目つき，鷺の翼のような腰，ウシの尻などである。写本3においては毛が短く粗いのはトラの毛のようでよく，毛が短くてぺったりしたのはシカの毛のようで中等となり，毛が密生して柔らかいのはキツネとウシの毛のようで悪いと，ウマの毛の良否も判別される（同前 52）。またウマの筋には距離長短を選ばないラクダの筋，短距離を速く走るヘビの筋，長距離を速く走る黄羊の筋などがある（同前 83）。写本5では歯の隙間の肉がアヒルの舌，雀の舌だとなぞらえられている（同前 143）。写本7では貴重な犬歯だとされる「歪んだシカ」<sup>56)</sup>「鳳凰の爪」<sup>57)</sup>というように犬歯は動物の名を指して名付けられる（同前 179）。さらに写本6では一頭のウマに魚のような肋骨，ヘビのような背中，トリのような胸骨，シカのような肩甲骨，ライオンのような首などが具わったら，そのウマは間違いない良いウマだという（同前 158）。良いウマには，より多くの動物の優れた特徴を有することが強調されている。

### 2.3 ウマの動作

まずウマの声を他の動物になぞらえて見分けることによって，ウマは3等に分けられるという。同様に識別されるのは写本3にも見られる。つまり雲雀のように声高の鳴声を持つのは上等なウマであり，禿鷹のような鳴き声を持つのは中等なウマで，ブタの鼻から出したような声を持つのは下等なウマだと示されている（同前 75）。

また水の飲み方によってトリやトラのようなウマがよく，野生ロバやシカのようなウマが中等で，ウシとロバのように水を飲むウマは悪いとされる。写本5でもまったく同じように見なされている（同前 150）。写本3では水の飲み方によってトリ，肉食獣，シカ，野生ロバ，ウシやロバ，黄羊，アヒルのようなウマと見分けられ，さらにそれぞれの特徴にあわせて調教を施すのが説明されている（同前 75）。

そして写本4では盤羊、オオカミ、キツネ、孔雀のようなウマには水と草をそれぞれ合わせることが説かれている。写本9ではウマの歩き方も他の動物になぞらえ、ラクダ、ウシ、イヌ、ブタのように歩くウマが悪く、イタチ、孔雀、ライチョウのように歩くウマがよいというように識別されている（同前 215）。

このようにウマの姿形をはじめとして身体部位、動作までのほとんどが多く動物になぞらえられ、強い印象が分かりやすく表現された。モンゴル遊牧民は自然界に棲息するさまざまな動物の習性を詳しく知り、それらの動物が有する優れた能力を強く認識している。さらにかねらの動物それぞれの能力をウマにも持たせようとした意識が十分に窺われるだろう。

### 3 ウマの秘密が分かる見分けかた

ウマの見分けかたにはウマの歯が重要なポイントとして詳細に識別される。写本4ではウマの歯について説明の分量やその詳しさが『ウマの特徴』の他の写本を遥かに上回るが、歯の100以上の特徴があげられ、精密を極めた見分けかたが示されている。まずウマの歯は色、形、大きさ、厚さ、長さ、歯ぐきなどの特徴によって7種に大きく見分け、そのうちさらに47種に詳しく区別された。また歯に現れるいろいろな細かい特徴が鋭く観察され、「しるし」と総称されるが、「しるし」それぞれに名前がつけられて数多くあげられる。そして歯のある部分が欠けたり、色が変わったりすることも識別される。このような精細な見分けかたによってウマの調子と性能が分かると見なし、ウマの秘められた能力を見出そうとしている。

#### 3.1 ウマの調子

写本4では歯によってウマの精神的な面が分かるとされている。歯の根元や左側の歯が折れたことによって秋と春にウマの調子が悪くなったり、疲れ切ったり、毒や病気にかかったりした状態を把握しようとしている。

また「青いジャーガ」というしるしが現れると、ウマ自身ではなく、持ち主までも影響を及ぼすことになるという。

また同じく写本3でも夏と冬に真ん中の4つの歯が欠けたり、青くなったりする。または春と秋に4本の奥歯が欠けたり、青くなったりすると、季節別にウマの落ち込んだ様子が分かるという（同前 80）。写本2では奥歯が青くなって折れれば、女性が乗用した。門歯が歯茎まで割れたらウマは自信を無くしたとされる（同前 47）。写本5ではどの歯であれ、歯先が欠けると、そのウマは足を怪我した。門歯が折れれば、胸を痛めた。犬歯が折れたら、ウマは落ち込んだ。門歯が青くなれば、ウマの肉がこけたと見なされる（同前 141）。また良いウマの歯が垢に覆われると、その年には走らない。門歯の茎は血がなくてこけるとそのウマは死ぬという（同前 142）。こうして歯が欠けたり、歯の色が変わったりする状態によってウマの調子をきちんと把握できることが認識され、さらにウマの能力が発揮されるかどうかまで見極めようとしている。

そして写本2では次のようにいう。冬にウマの調子が悪くなるのは、脾臓と腎臓によるため、腰を湿布で温める。秋にウマの調子が悪くなれば、脾臓と子宮によるため、白い牝ウマの乳に塩を投じてやるとよくなる。女性が乗用したからウマが落ち込むと、黄色く燻したフェルトを水洗いし、その水を沸かした後ウマの右鼻穴に注ぐとよくなる。ウマが自信をなくしたら、そのウマを母ヒツジのところへ急いで走る当歳ヒツジと一緒に競わせればよいという（同前 47）。こうしてウマの調子を前もって把握できれば、それに対応する方法を施すことも可能とされ、ウマの調子を工夫してきちんと整えることが重視されている。

### 3.2 ウマの能力

写本4ではウマの歯にできた模様、垢、割れ目、凹みや色などの細かい特徴によって名付けられた数多くのしるしはウマのスピードとどのぐらい



の距離を走れるかを示し、ウマの能力や性質に関わっている。

ウマのスピードが速い、やや速い、遅いというように区別されている。写本5では「赤い暗流」が速く、5、6百頭、さらに千頭のウマの中に卓越するという。「余った壁」「矢のような黒木」はとても速く、「暗渠」はやや速く、「ツルツルとした野生ロバ」は遅いと示されている。

また歯のしるしによってウマの持久力が判断され、どのぐらいの黒白の道のりを走るかが見極められている。黒白の道のりは家畜の毛色が目で判断できる距離であり、地形や人の視力によって差が生じるものの、1つの黒白の道のりは3-5kmにあたるだろう（サロールボヤン 2000:94）。写本4では異なるしるしの歯を持つウマは1から8までの黒白の道のり（大体3-5kmから24-40kmにあたる）に適するかどうかがそれぞれ詳細に示されている。「紋様のウシ」「矢のようなカラス」などは短距離に適し、「永久の花」「骨錐のような簪」「長いへび」などは長距離を走り、「鉄杖」「樺の肘」とは距離の遠近にかかわらず走るといふ。

さらにこれらのしるしによってウマの性質まで考慮されている。ウマが乗用に向いているか競馬に向いているか、山道、水や沼の場所に適するか、草原によく走るか、山や草原どちらにも適するか、暑い太陽の日や雨の涼しい日または干ばつの時によく走るかなど、地形から天気までの多くの条件が考慮されウマが見定められる。写本7でも同じように考えられている。「竹の杖」は湿気の日によく走り、暑い日は走らない。「白っぱい銅」は夏によく走り、冬は走らないという（Lubsangbaldan 1978:178）。

上述したように歯の精密を極めた見分けかたによって、ウマの調子、そしてウマの持久力、スピードなどの性能を把握しようとしている。モンゴル人はウマの走りを支える秘密の特徴を強く意識し、ウマの性能に対してさらなる期待を込めているのである。

#### 4 縁起のよいウマの見分けかた

モンゴル遊牧生活においてウマはさまざまな用途に利用され、物資的な面に大きく関わる。さらにウマの毛色、旋毛、そして目や耳のありよう、反応などは縁起がよく、福があるなどの精神的な面にも深く絡んでいる。

##### 4.1 毛色による

写本4では戦闘に出かける、貴人が乗用する、貴人のお供になる人が乗用するなどの場面に縁起のよいとされるウマの毛色が14種識別されている。同じ場面において縁起のよい毛色は写本5にも言及され、写本4と全く同じ毛色があげられている（同前 143）。また写本8ではウマの華となる足の栗毛のウマ、ウマの福となる黒いタテガミの茸毛、ウマの飾りとなる黄金のような薄黄毛という最も縁起のよい毛色が示されている（同前 199）。さらに写本5は縁起のよい斑の毛色にも触れ、左右に均等な斑は目を楽しませる毛色、ぶちのある黒毛、ぶちのある栗毛、また斑の黒毛、斑の赤毛、斑の栗毛などをあげている（同前 144）。

これらの縁起のよい毛色は誰にもあうが、縁起が悪いと禁ずる毛色もある。写本4では示されなかったが、写本3は戦闘に出馬したり、お供になる人が乗用したりする場合に忌む毛色を取りあげている<sup>58)</sup>。さらに写本8では所有しないほうがよいとされる毛色まで示されている。それらは頭が黒く、白毛のウマ、鼻面が黒く、口が肝臓色のウマと地獄のウマともいわれる口が黄色く、斑のウマである（同前 194）。

縁起のよい毛色が生活場面に関わって見分けられるが、モンゴルにおいては種ウマの毛色が重視され、黒毛、栗毛、褐色の栗毛を選ぶ伝統がある（Sambu 1945: 165）。これは種ウマの強さが強調され、黒色のシンボリズムが現れている。このような種馬となるウマと、縁起がよいウマの毛色の異なる点にはモンゴル人の色彩に対する認識を見ることができよう。

ところで良いウマの選定においてはどのような毛色かがはっきりと示さ

れず、毛色が明るく、弾力がよければ、ウマはよく走ると強調され、毛色はウマの外観特徴の一般的な標識のみとして捉える場合が多い。

#### 4.2 旋毛による

ウマの旋毛が縁起に関わって重視されるのは、縁起のよい毛色と同じく、旅、狩猟、戦闘、盛典など多くの場面に関わる。写本4では額、後頭部、両肩、頬、鬣甲、仙骨、胸骨柄、両膝、両踵にある太陽右回りの旋毛やはっきりとした旋毛が縁起のよいと示されている。写本5も同様な縁起のよい旋毛を取りあげている (Lubsangbaldan 1978: 143)。写本1では額、仙骨、胸骨、鬣甲、両脇（ここにある旋毛で持ち主の畜群が繁栄するという）にある旋毛が識別された（同前 26）。また縁起の悪い旋毛について写本4はあげなかったが、写本3では首には太陽左回りの旋毛があれば悪く、両目の下に旋毛があれば未亡人の運命だといい、そのウマの乗用を避けるように説かれている（同前 83）。

旋毛はどこにあるのかとその形によって善し悪しが見分けられる。写本10では通常ウマの特徴には96の旋毛が含まれ、さらにこれらの中に縁起のよい旋毛が20<sup>59)</sup> があるという（同前 237）。また旋毛の形は8つあり<sup>60)</sup>、その中には太陽の右回り、水の渦のような、花びらが開いたような、貝のような旋毛がよいとされる（同前）。したがって縁起の悪い旋毛が多く、写本9では76もあるといい、縁起の悪いところに形を整えた旋毛があっても縁起は悪く、形の崩れた旋毛が縁起のよい位置にあっても悪いとされている（同前 225）。これらの写本ではともに、善しと見なされるところに善しとされる形をした旋毛があれば縁起がよいと見なされている。

旋毛は物事の善し悪しの兆候とされるとともに、ウマの性能のしるしともされる。写本5ではウマの速さにプラスになる旋毛が示されている。短い脇、口首、鬣甲骨、耳の付け根、両ひざ、両脛などに旋毛があれば、ウマは走るが、それ以外の旋毛は走りに役立たないと判断される（同前 142）。

写本4では性能と縁起のよさの両方を表す「急流の渦」が示されている。

#### 4.3 その他による

写本4ではウマの目と耳が良いウマの見分けかたにおいて重要なポイントとして重視されるとともに、目つきとその様子、耳の生え方とその動きなどによって物事の吉凶も識別されている。また持ち主が取る行動に対してウマがどのように反応しているか、つまり持ち主がウマの歯をみたり、ウマの前からみたり、または乗用したりする場合、ウマが見せるいろいろな反応は日常生活場面と関わり、縁起がよいかどうかを見分ける。こうして物事の吉凶をうらなうのは他の写本においてあまり見られなかった。

ウマの目や耳のありよう、そして反応はそのウマ自身、ウマの群れ、そして持ち主に対して起こる出来事の前兆として捉えられる。まずそのウマ自身に対して起こることが予測される。盗人に盗まれたり、自らが逃れたり、また他人に渡されたりして持ち主やウマの群れから離れる。あるいはウマが病気にかかったり、死んだりすることも分かるという。次にウマの群れに対しては、連れが多くなったり、ウマの群れが繁栄したりすることが強調されている。そして持ち主に対して戦闘、狩猟または旅に使役するときに縁起がよいかが見分けられる。また持ち主が大きな厄にあったり、喧嘩になったりすることが予測される。悪い事が起こりそうだと分かれば、そのウマの乗用を止めるように戒められている。そしてウマが縁起のよい反応を見せ、持ち主が地位と名誉を得たり、大幸運をもたらされたりすることが予測されると、そのウマを他人に渡してはならず、もっと大事にするように説かれている。

一方、目や耳のありよう、そして反応によってウマが暴れやすく、荒っぽく、怖がりやすいかなどの性格が分かり、速く走るかどうか、長距離に適するかかなどのウマの性能まで発見され、ウマの良否も知ることが可能とされている。写本5では耳の生え方によってウマの性格が分かると

示されているが（同様 141）、他の写本では見られなかった。

このようにウマの毛色、旋毛そして目や耳のありよう、さらにウマの反応が縁起に関わり、縁起のよいウマに乗用して出かけたなら、旅を無事に続けたり、戦闘に勝利を収めたり、獲物を多く獲たりするなど生活に対するモンゴル人の素朴な願いが込められているのである。

以上のように『ウマの特徴』の写本4の訳注を行ない、他の写本を参照しながら考察することによって、モンゴル遊牧民の生活場面において適応されるウマを選んでいたさまざまな基準が明らかになった。

ウマを選ぶ多様な基準はモンゴル遊牧民の生活生産さらにその歴史的発展においてウマが果たした重要な役割に基づくものである。モンゴル遊牧民はウマを幼いころから一頭一頭、その外観の特徴から動作、性格に至るまで知り尽くし、さらにさまざまな用途に利用する経験を通し、独自の知識を蓄積し、ウマの完全な利用を実現してきた。したがってモンゴル遊牧生活の継続そのものが保障されたのである。

ウマの完全利用をめぐるモンゴル遊牧民とウマとの付き合いが深まるにつれ、ウマによる機動力、そのスピード、持久性などのすばらしい性能が十分に認識され、ウマにさらなる性能や能力が期待される。動物界における数多くの動物の優れた能力を具えたり、ウマ自身の潜在能力を発揮させたりして、モンゴル遊牧民の理想なウマが具現化してくるのである。

さらに理想なウマを信じれば、願いを叶い、望みを満たしてかつ鼓舞してくれるという意識が強まり、厳しい自然環境の中に安定した生活を実現する素朴な願望が込められ、ウマはモンゴル人の精神的な頼りになる存在として認められたわけである。

良いウマを通してモンゴル遊牧民の思考、そして自然と融合して生活する自然観ないしその世界観の一端が色とりどりに展開されたともいえよう。

注

- 1) *Dumdadu ulus-un erten-ü monγol nom bičig-ün yerüنگkei yarčay* nairayulqu jüblel 1999 *dumdadu ulus-un erten-ü monγol nom bičig-ün yerüنگkei yarčay* (dooradu) begejing nom-un sang keblel-ün qoriy-a (中国モンゴル語古典総目録) pp 1666-1669
- 2) 『ウマの特徴』における写本 1, 2, 8, 9 の内容はそのまま含まれているが、その他の内容は必ずしも対応しない。たとえば、写本 4 の原典について冒頭の 4 行詩が除かれたあと、1a から 5a の 5 行までの内容のみが 1 つのまとまりを持ち、タイトルの不明な写本とされている。残りの内容は他の写本と比較され、より完全なものが残されたとされている。したがって写本 4 の内容と似た部分が『駿馬の特徴』においていくつかの写本に分けられている。
- 3) 1999年にキリル文字からウイグル式モンゴル文字に転写されたものが中国内モンゴル自治区で出版された。
- 4) *mongγolčud ba mori, öbör mongγolčud-un aduyun soyol, mongγol jang üile-yin nebterkei toli* (aju aqui-yin bodi), *qurdun morin-u sinji-yin sudur-un tailul, erdenitu külig-ün dalda tobciyan orusibai*, 「モンゴルにおける駿馬の鑑定法——相馬経考察」などがある。詳しくは参考文献リストを参照する。
- 5) 綴り語が欠けたため、意味不明である。
- 6) 遊びを意味する。モンゴルにおいてナーダムは夏の祭りとして広く知られ、国家、地方のアイماغやソム（モンゴルの行政単位、日本の県や郡にあたる）の行政単位ごとに開催され、規模もさまざまである。その際男の三競技と称される相撲、弓射、競馬を行う伝統が守られて今日に至っている。競馬において参加するウマの頭数は決められず、規模によってさまざまである。
- 7) (尻尾は) 太くて短く、弾力がよくないと、または細長く、弾力がよいと、条件を入れ換えれば、中等である。
- 8) (ウマの) 食べ量が多く、糞が多ければと、(ウマの) 食べ量が少なく、糞が少なければと、条件を入れ換えれば、中等である。
- 9) 写本 4 ではウマの歯について精密を極めた見分けかたが示されている。写本 1 では歯の特徴が最も多く、そのすべてを識別するのは難しいとされ、成年ウマの歯が次のように見分けられている。上下歯の根元が細く、歯先が広

- がり、歯茎は歯の真ん中まで伸び、犬歯は突き出て、下の6つの歯は表の端がすこし外へと突き出て、互いに向き合ったのは良い歯だという（同前 29）。
- 10) 写本4では筋について具体的な説明がなされなかったが、写本7では筋の5つの特徴と性能との関係が示されている。ぺったりして、幅が広い筋は長距離に適し、とてもよい。人指し指ごとくの四角な筋は弓の弦のようであり、速い。矢ごとくの細い筋は長距離に適する。太い筋は弾力がよい。どのような筋であれ、柔らかければ、長距離か短距離に適するという（同前 181）。
- 11) どのような外観の特徴が好まれるかという意味である。写本4では具体的な説明がなされなかったが、他の文献では好みの意味の20項目が述べられ、それは次のようである。老いた野生口バの頭、ヤクの角を切ったような口、銅器をひっくり返したような額、老いた官人の顔のような鼻面、盛り上がった肩、ヘビの背中、座布団に座ったような尾骶骨、飾りをつけたような胸、持ち上げたような尻、太い関節、健康な体、鉄製の腕をひっくり返したような蹄、絹に包んだ石のような睾丸、大きい歯、大きく開けた口角、鶯が羽を開いたような耳、押し込まれたような狭い目、家が立ったような肋骨、シカのようなひかがみ、シカのような胸骨などが好まれるという（Lubsangbalдан 1999: 113）。
- 12) ウマの外観の特徴が何かに喩えられた言葉の意味である。写本4では具体的な説明がなされなかった。写本7は外観の喩えという項目をあげているが、それを参照すると、ラクダのような頭、ラッパの口のような鼻、オオジカのような唇、カエルのような目、ラクダのような後頭部、盤羊のような頸、鶯のような肩、力士の胸肉のような黒肉、牡ヤクのような鬣甲、オオジカのような脛、力士のような顎、野生ウマのような項、シカのような肋骨、力士のような背中、3つの支えがある炉のような骨のつなぎ目、飛んだ秃鷹の羽のような両腰、ノロジカのような太もも、強い英雄の弓矢を帯びたような尾、野生口バのような4つの蹄、ひっくり返した釜のような4つの蹄、黄羊のような毛、撚った筋のような剛毛、3股で太く撚った縄のように親指が入るほどの隙間がある足筋などが半数以上具わるのはよいとされている（Lubsangbalдан 1978: 157）。
- 13) 後に説明される肉の30種の特徴を指している。
- 14) 歯にできた細かいしるしによってウマの良否またはウマがどのように影響

されたかを見分けようとした。

- 15) ウマの毛色、旋毛、またはウマの目や耳のありよう、そしてウマの反応によって縁起がよいかどうかを見分けようとした。
- 16) 7つの重要だと述べたが、実際には5つしか示されていない。他の文献では麕のゆったりした頭、強いシカの肉付きの良い頬、トラの強い口、斑のカエルの突き出た目、ヘビの目のような瞳、白いライオンの鼻穴、禿鷹の広げた羽のような耳などがあげられている (Lubsangbaldan 1999: 113)。
- 17) 意味不明だが、歯の由来が仏に関わるとされ、仏教的影響が示されたのではないかと考えられる。
- 18) 2歳の種ウマと牝ウマを掛け合わせ、当歳ウマを生ませる意味だと思われる。
- 19) 綴り語が欠けたため、意味不明である。
- 20) 他の写本を参照すれば、頭の特徴は写本2において、後頭部が高く、耳がまっすぐで、耳の付け根が太く、耳先が細くて薄く、長く、額がゆったりとして、後頭部の両側の肉がはっきりとしていて、両上脛は両側が薄く、真ん中が厚く、鼻面はまっすぐで、割れ目があり、鼻孔が広く、鼻翼が大きく、口が大きく、口角が薄く、頬の肉付きがよく、顎が丸々として、舌の寝床が広く、歯と犬歯との色が同じで、唇と上顎がきれいである (Lubsangbaldan 1978: 49)。歯については注9を参照のこと。3つの隆起とは写本2において後頭部が高く、鬘甲が高く、多くの骨のつなぎ目が高いとされている (同前 49)。4本の足の特徴とは写本2において家の柱のようにまっすぐで、脛骨が太く、長距離をよく耐えるとされている (同前 54)。
- 21) ウマの「野生ロバの歯」に属するしるしであり、後に説明がある。
- 22) ウマの犬歯のしるしである。写本3において「崖が険しい」とは奥歯より外へと突き出ている、先は半分ハートの形をしているという (同前 79)。
- 23) 写本3では歯の良いしるしがある上、犬歯の良いしるしがあれば、ウマはよく走る。歯と犬歯のどちらにも良いしるしがあれば、ウマは走らないとされている (同前 82)。
- 24) 写本2では地面の上りへ向かって横たわった牝ウマから生まれた当歳ウマは前足が長く、左半身が引き締まった。地面の下りへ向かって横たわった牝ウマから生まれた当歳ウマは前足が短く、右半身が引き締まったという



(同前 52)。

- 25) *ajiry-a-yin teg ese oldabasu gegüü-ni čig bolday* と示されているが、種ウマがよくなければ、牝ウマが不妊になるという意味だと思われる。
- 26) 頭の11の特徴、歯の11の特徴、肉の30の勇敢な特徴、上の3つの隆起、下の4つの杖については『モンゴルの特徴』を参照するように示されているが、参照すべき文献そのものがいまだ発見されていない。頭については注20を、歯については注9を、肉の30種の勇敢な特徴については注28を参照のこと。上の3つの隆起と下の4つの杖とは3つの隆起、4本足の特徴をそれぞれ指しているが、注20を参照のこと。
- 27) 写本7では太陽が昇る頃、昼頃、太陽が沈む頃のどれか1つの時間に牝ウマから生まれた当歳ウマは全身の特徴がすべて具わったら確かに駿馬になるという(同前 186)。
- 28) 肉の特徴が30種だとされているが、取りあげられた特徴には不明な点がある。『ウマの特徴』の他の写本においても同様な項目は見られなかった。他の文献では肉の18の特徴と称された項目がある。額の肉がカエルが茂みに隠れたようであればよく、両頬は臼を袋に入れたようであればよく、下顎は急に泥が付いたようで、首の肉は鼻面から続くようで、肩の肉は龍の翼のようで、胸肉は女性の乳房のようで、肩甲の肉はいつかの鎌を曲がらせたようで、前足の筋肉は粗い毛を撫ったようで、背中から腰にかけて筋肉は畳んだフェルトのようで、短尾の左右筋肉は人間が立ち上がったようで、左右の筋肉は去勢牛の角のようで、腹は水を入れたようで、左右脾肉の下部分は外へと盛ったようで、外側の脾肉は黒いヘビが滑ったようで、内側の脾肉は盛り上がったようで、4つの蹄の上部分は輪をはめたようで、それぞれあればよいと示されている(Lubsangbaldan 1999: 129)。
- 29) ウマの歯に現れるしるしの一つだが、具体的な特徴は不明である。
- 30) 写本3では良い歯があっても、良い外形がなければ、ウマは走らない。良い外形があっても、歯の良い特徴がなければ、やはりウマは走らないため、この2つは気をつけて習えとされている(Lubsangbaldan 1978: 82)。
- 31) 意味不明だが、ライオンのような外形につりあう歯を説いたと思われる。
- 32) 写本4において説明されなかったしるしを示しておく。写本3では「努め」とは青っぽくて突き出たしるしを指している。「そそっかしい」の特徴は不

明である。「並び」とは上下歯をあわせてみると、端の2つの歯の並びがきれいで、中間の2つの歯は隙間があるという（同前 77）。

- 33) 写本4において説明されなかったしるしを示しておく。写本3では「梯」とは歯の真ん中から歯先まで凹みがあるという。「囲み」とは下歯の黒窩が丸く、横の凹みがあるという。「気」とは歯と歯との間に隙間があるという。「歪み」とは歯があちこちに傾いたさまだという（同前 77）。「つなぎ」の特徴は不明である。

- 34) ウマの調教は走らせる、汗を取る、休ませることをどのような間隔で行うか、または走らせる方、その距離、日数などをそれぞれのウマの状態と年齢に合わせて決められる。写本4では25日間の調教について具体的な説明がなかったが、他の文献を参照しよう。1日目は1キロほど常歩で歩かせ、さらに1キロほど速歩で走らせ、再び1キロほど常歩で歩かせる。2日目は短距離を走らせる。3日目は汗を取る。4日目は短距離を走らせて放す。5日目はギャロップを加える。6日目は短距離を走らせる。7日目は休ませる。8日目は汗を取る。9日目は夜捕まえて昼間走らせる。10日目はギャロップする。11日目は短距離を走らせる。12日目は汗を取る。13日目は短距離を走らせる。14日目は休ませる。15日目はやや長距離を走らせる。16日目は夜捕まえて朝走らせる。17日目は常歩で歩かせる。18日目は清める。19日目は早く捕まえてテストする。20日目は短距離を走らせる、21日目は短距離を走らせる、22日目は常歩で歩かせる、23日目は休ませる。24日目は短距離を走らせる。25日目はナーダムの本番である（Lubsangbaldan 1999: 59）。

競馬の調教日数はウマの年齢と用途によって異なる。写本1では力強いウマを21日間調教し、力弱いウマは19日間から17、15、13、11日間というように徐々に調教日数を減らして施すという（Lubsangbaldan 1978: 24）。写本2では2、3歳ウマを9日間、4歳ウマは15日間、5歳ウマは19日間それぞれウマの状態に合わせて調教するとされている（同前 48）。

- 35) 聖主の乗馬となる駿馬の宝な特徴は36あると示されたが、項目が足りない。残りの特徴を他の文献によって参照すると、鼠径と額に旋毛があり、鬣甲と足の位置が中へ、鬣が大きく、4本の足の筋が外へ、10日間乗用するなら毎日5時間食べればよい。山にいつでも均等によく、常に疾駆しても痩せず、すぐに疾駆すれば不器用で、1ヶ月乗用しても肉を落とさず、痩せない。4

モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

本の足の裏にはタコが出ず、鞭打っても痛まない。蹄が丸々としていて、肋骨が長く、両腰が広い。このウマが識別されるのはとても難しく、このウマの父ウマは qastabu（玉の五つ）といい、母ウマは quustabu（対の五つ）という。種ウマは見つかるが、牝ウマは見つかりにくいと示されている（Lubsangbaldan 1999: 123）。

- 36) 家畜の脚根骨の距骨を指すが、後足に1つずつある。
- 37) ウマの歯に現れるしるしの1つである。写本4では具体的な特徴が示されなかったが、写本3では歯に上から下へと細い凹みがあるという（Lubsangbaldan 1978: 76）
- 38) ウマの「ウシの歯」に属するしるしの1つであり、後には説明がある。
- 39) ウマの歯に現れるしるしの1つである。写本4では具体的な特徴が示されなかったが、写本7では歯の黒窩に青いしるしがあるという（同前 178）。
- 40) qonda-yin buyurul örtegen-ü sidü と示されているが、意味不明であり、一応このように訳しておく。
- 41) 金剛石
- 42) 国の実権を握る人
- 43) 写本7において妊娠中の牝ウマは左後足がちょっと沈めば牝の当歳ウマを生み、その牝の当歳ウマはまた良い当歳ウマを生むという（同前 186）。
- 44) 隙間があるという意味だが、写本5では5つの気というものがあげられ、両膝の間が拳の入るほど広く、股が広く、顎のつなぎ目が広く、歯の隙間が広く、筋の隙間が広いと示されている（同前 142）。
- 45) *Achnaterum splendens* Kunth, モンゴル草原で生える家畜に好まれる牧草の1種。
- 46) モンゴルにおける距離の単位であり、1ペーラは約2キロにあたる。
- 47) 競馬においては上位5人が入賞する。第1位に興奮、第2位に幸運、第3位に太陽昇り、第4位に隼、第5位に強いゾウというようにそれぞれのウマに称号を与え、馬乳酒をかけ、マグタールと呼ばれる讃歌が歌われ、褒め称えられる。5着に入るということは多くのウマが参加する中で非常に難しいことでもあり、それゆえに入賞したウマへの賛辞も大きい。5着に入ったウマは大変優れたウマであることも明瞭されている。
- 48) 良い歯であるが、外形の小さいウマにあわないという。つまり歯と外形が

つりあわないことを意味する。

49) 上下歯の隙間が均等である。

50) 良い外形に良い筋があれば、ウマはよく走る。そうでないとウマは走らないと思われる。

51) 「大きな」駿馬の特徴とは四角な頭があり、突き出た目があり、長い首があり、体が四角で、背中が凹んで、胸と尻が均等で、太ももが太く、股が広く、胸には9つの旋毛があり、尻には8つの旋毛があり、走っても驚かない良いウマである（同前 27）。

52) 「速くきれいな」駿馬の特徴とは、目つきが鋭く、耳が凹み、毛が疎らで、剛毛がなく、驚きやすい（同前 27）。

53) 13の大きい（額、顎、眉骨、頸、背中、口、腹、筋肉、胸肉、4つの蹄）、9つの長い（4つの脛骨、背中の関節、首、耳、舌、股）、6つの太い（口、両耳の付け根、足、尾根、頭）、6つの細い（両耳の先、両耳の孔、頸、鼻面）、9つの広い（4つの蹄、額、鼻孔、耳、胸、股下）、5つの短い（腰、腕骨、尾、肩胛骨、尾骨）、3つの高い（後頭部、鬣甲、臀部）などがある（同前 157）。

54) 写本2は13の大きい、9つの長い、5つの細い、5つの短い、3つの秘密（歯茎が痩せこけて、長骨のつなぎ目が太く、口と鼻が大きい）というように見分けている（同前 49）。

55) 写本2において牝シカの頭とはゆったりとして、肉がなく、眼が突き出て、鼻面が長い様子だという（同前 50）。

56) 写本7では「歪んだシカ」とは1つの犬歯が短く、もう1つが奥歯より離れた状態だという（同前 179）。

57) 写本7では「鳳凰の爪」とは犬歯の端には凹みがあり、鋭いことをいう（同前）。

58) 斑が傾いた毛色、鼻面が赤く、目が黄色いウマ、泥で汚したような黄色、腰の部分にはサルが乗ったような斑があるウマ、目が青っぽいウマ、燃やされたような黄色などである（同前 75）。

59) 額にある4つの旋毛、口、口角、耳の付け根、頭の両側、肩にある2つずつ、また額、首、頬にある1つずつ、そして胸にある3つの旋毛と合わせた20の旋毛は縁起がよいという（同前 226）。

モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

- 60) 複合した形の旋毛, 水の渦のような旋毛, 歩くときに花びらが開くようになる旋毛, 歩くときに花びらがしほむようになる旋毛, 蕊のように盛った旋毛, 貝のような旋毛, 四角と三角の形をした旋毛の8つだという(同前)。

参考文献

日本文

- 井上邦子 2002 「モンゴル国の「競馬ウマ」にみる聖性についての研究——ナードム祭に参加する「競馬ウマ」の調教法を事例として」『スポーツ人類学研究』4
- 内田敦之 1987 「モンゴルにおける人と馬の関係について」『モンゴル研究』10
- 王海清 1992 『蒙日辞典』タカラ出版サービス
- 小沢重男編著 1994 『現代モンゴル語辞典』(改訂増補版) 大学書林
- J・サロールボヤン 尾崎孝宏訳 2000 『セツェン=ハンの駿馬——モンゴルの馬文化——』礼文出版
- 徳廣彌十郎 1998 『日蒙漢辞典』ビブリオ
- 荻原守 1999 「『トーワンの教え』について——十九世紀ハルハ・モンゴルにおける遊牧生活の教訓書——」『国立民族学博物館研究報告別冊』20
- 原山煌 1995 『モンゴルの神話・伝説』東方書店
- 精松源一 1970 『新蒙日辞典』大阪外国語大学蒙古語学科
- 布林バト 1995 「モンゴルにおける駿馬の鑑定法—相馬経考察」『シルクロードとスポーツ シルクロード・奈良国際シンポジウム'95』記録集3
- 芒来, 楠瀬良 1997 「馬の文化 日本在来馬のルーツ: モンゴル馬?! モンゴル競馬について (上)」『馬の科学』8
- 芒来, エルデニバートル M, 楠瀬良 1999 「馬の文化 日本在来馬のルーツ: モンゴル馬?!」『馬の科学』8
- 楊海英 2001 『草原と馬とモンゴル人』日本放送出版社
- 陸軍省編纂 1978 『蒙古語大辞典』南天書

モンゴル文

- Ayosi-yin Batubolod 2006 *qurdun morin-u sinji-yin sudur-un tailul* ulayanbayatur

(速いウマに関する経書の解釈)

To Manglai Borjigin Wangcuγ 2002 *mongγolčud ba mori öbör mongγol-un sinjilekü uqayan teqnig mergejil-ün keblel-ün qoriy-a* (モンゴル人とウマ)

To Manglai Galindar-a 2013 *öbör mongγolčud-un aduγun soyol öbör mongγol-un keblel-ün bölögöl, öbör mongγol-un surγan kümüjil-ün keblel-ün qoriy-a* (内モンゴルにおけるモンゴル民族の馬文化)

*Mongγol jaγg üile-yin nebterkei toli* nairayulqu komis 2009 *mongγol jaγg üile-yin nebterkei toli (aγu aqui-yin bodi) öbör mongγol-un sinjilekü uqayan teqnig mergejil-ün keblel-ün qoriy-a* (モンゴル民俗百科辞典経済篇)

Q Lubsangbaldan 1978 *morin-u sinji* ulayanbayatur (ウマの特徴)

——— 1989 *külüγ-ün sinji* ulayanbayatur (駿馬の特徴)

——— E Dayičin 1999 *külüγ-ün sinji öbör mongγol-un arad-un keblel-ün qoriy-a* (駿馬の特徴 転写)

ǰ Sambuu 1945 *malčin arad-du ögkü sanaγulγ-a surγal* ulayanbayatur (牧業者への助言)

Sečenmönöge 2000 *irügel maγtayal-daqi mongγolčud-un soyol-un sedkilge ündüsüten-ü keblel-ün qoriy-a* (祝詞, 讃歌におけるモンゴル人の文化の意識)

D Tawa 2006 *erdenitu külüγ-ün dalda tobciyan orusibai üjümüčin-ü altan türüge soyol oraliγ-un tasuγ* (宝となる駿馬の秘密を分かる経書)

E Dayičin 1998 *qurdun morin-u sinji öbör mongγol-un silinqota* (速いウマの特徴)

*Dumdadu ulus-un erten-ü monγol nom bičig-ün yerüنگkei γarčay* nairayulqu jöblel 1999 *dumdadu ulus-un erten-ü monγol nom bičig-ün yerüنگkei γarčay* (dooradu) *begejing nom-un sang keblel-ün qoriy-a* (中国モンゴル語古典総目録)